

## 水稻新品種「ヒゴノハナ」「ヒノヒカリ」

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	八木, 忠之
巻/号	44巻9号
掲載ページ	p. 420-421
発行年月	1989年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



# 研究 通 報

## 水稻新品種「ヒゴノハナ」「ヒノヒカリ」

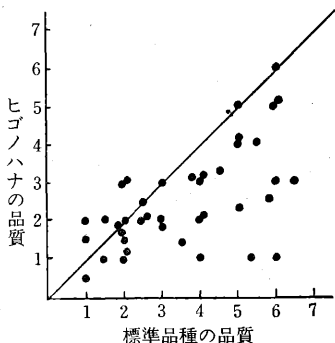
八 木 忠 之

### ヒゴノハナ

登録番号：水稲農林 298 号 系統名：南海 92 号（昭和 58 年命名）交配組合せ：ミナミニシキ//宮系 902（ニシヒカリ）/コガネマサリ

#### 特性の概要

ヒゴノハナは、出穂期・成熟期ともミナミニシキより 4～5 日早い暖地では中生の晩に属する粳種である。稈長はミナミニシキとほぼ同程度の短稈で、穂長はやや短く、穂数はやや多い、やや短稈穂数型の草型である。葉色はやや淡く止葉は直立し草姿は良い。粒着密度は中で少程度に短芒がある。稈先色は黄白、脱粒性はやや易である。



第 1 図 品質の比較(1:上上~7:下下)  
(奨励品種決定試験, 昭和 58~63 年)

玄米の粒形粒大は中位で、腹白・心白の発生がごく少なく、光沢大でミナミニシキにまさる良質である。搗精歩留は普通で、食味はニシホマレより良く、ミナミニシキ並に良い。

耐倒伏性はミナミニシキ並の強で、収量性はミナミニシキにやや劣る。

いもち病抵抗性遺伝子型は十と推定され、葉いもちはミナミニシキ並の中、穂いもちはミナミニシキよりやや弱いやや強に属する。白葉枯病抵抗性品種群は黄玉群に属し、圃場抵抗性はミナミニシキより強く日本晴程度の中である。縞葉枯病にはミナミニシキ同様罹病性である。

#### 栽培上の注意

①穂いもちにはやや強であるが、葉いもちには十分な抵抗性がないので、適期防除に努める。②やせ地で施肥をひかえたりすると収量が確保できず収量が上がらない場合もあるので、肥培管理に留意する。③縞葉枯病には

Tadashi YAGI: A New Rice Variety "Higonohana" and "Hinohikari". 農業技術 44 (9), 1989.

罹病性なので適期防除に留意する。

奨励品種採用県：熊本県

命名の由来：熊本県（肥後）に好適し、その良質性により肥後米の名声を高めることを願い、肥後華とする。

#### 育成後記

ヒゴノハナは、良質がセールスポイントの品種である。刈遅れた場合でも茶米の発生が少なく安定している。その上、強稈で穂いもちにはやや強、白葉枯病にも中位で栽培面からも良質安定生産が容易である。ミナミニシキの不評による熊本県産米の評価を挽回しうる良質の中晩生品種が必要となっていたが、ヒゴノハナは、こうした情況にピタリだったのである。

玄米はミナミニシキよりやや円みをおび、現地試験も含めた検査等級はミナミニシキよりほぼ一等級良い。

ヒゴノハナは、止葉がごく直立し、株も筒状に直立し、いわゆるもも割れ型を呈する。熟色が金剛由来の黄色というかオレンジ色というか独特である。肥料が少し足りないと、成熟期でも畦間から田面が見えることがある。一方、肥沃な熊本平野の展示圃では、子供が乗っても大丈夫ではないかと思えるほど繁茂しているが、登熟もすこぶる良く、障害も無く、ここが適地という姿である。ヒゴノハナがこれらの特性を生かし、熊本県の平坦部稲作の中心となって、肥後米の評価を高めることを期待する。

育成従事者：西山 壽, 八木忠之, 日高秀光, 愛甲一郎, 轟 篤, 小八重雅裕, 黒木雄幸, 本部裕朗, 吉田浩一

### ヒノヒカリ

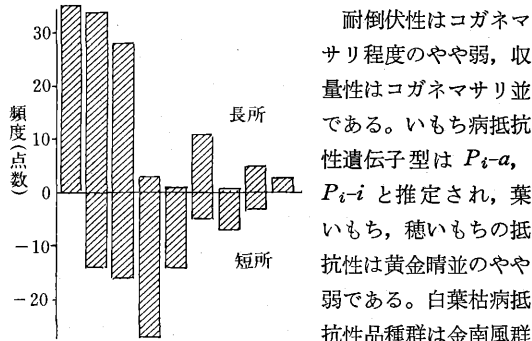
登録番号：水稲農林 299 号 系統名：南海 102 号（昭和 61 年命名）交配組合せ：愛知 40 号（黄金晴）/コシヒカリ

#### 特性の概要

ヒノヒカリはコシヒカリ並の良食味でコガネマサリ並の中生の中の粳種である。稈長はコガネマサリよりやや短く、穂長はやや短く、穂数はやや多い、やや長稈穂数型の草型である。葉色は中で止葉はやや立つ。粒着密度はやや密で短芒が稀にある。ふ先色は黄白、脱粒性は難である。

玄米の粒形は中、粒大はコガネマサリと同じやや小粒

で、腹白・心白の発生は少なく、色沢はやや濃、光沢大で、外観品質はコガネマサリ並の良質である。搗精歩留は普通で、食味はコシヒカリ並の極良食味である。



第2図 ヒノヒカリの形質評価一覽(奨励品種決定試験, 昭和61~63年, 計32カ所165点)

耐倒伏性はコガネマサリ程度のやや弱、収量性はコガネマサリ並である。いもち病抵抗性遺伝子型は  $P_i-a$ ,  $P_i-i$  と推定され、葉いもち、穂いもちの抵抗性は黄金晴並のやや弱である。白葉枯病抵抗性品種群は金南風群に属し、圃場抵抗性はやや弱である。縮葉枯病にはコガネマサリ同様罹病性である。

栽培上の注意

- ①ヒノヒカリはいもち病にやや弱いので、常発地での栽培はさけるとともに、その他の地域においてもいもち病に対する適期防除に留意する。
- ②耐倒伏性がやや弱いので、基肥を減らし、穂肥の時期に注意する等、肥培管理に留意する。
- ③白葉枯病にやや弱いので適期防除に留意する。

奨励品種採用県 福岡県, 佐賀県, 熊本県, 宮崎県, 鹿児島県

命名の由来：陽光。陽は西日本、九州を表し、待望の良食味品種で、飯米は光輝く。コシヒカリ、ササニシキと並ぶ西日本、九州の代表的品種となることを願う。

育成後記

ヒノヒカリの特徴は何といっても食味の良さにある。数年前まで、米の食味は個人の好みに属し、客観性はないとの意見も聞かれた。現在自主米市場のコシヒカリ優位は、一部で言われたように必ずしも作為だけではなさそうである。事実食味感応試験を実施するとパネラーの年代、場所を問わずヒノヒカリの評価が高い。コシヒカリの食味は炊飯米の光沢、粘りによるところが大きい。しかし、作期・場所等条件の異なるコシヒカリを試食してみると、光沢・粘りにもかなり変異がみられる。ヒノヒカリは九州産のコシヒカリのそのまた最上級のものと

比較しても劣らない。これは従来の草型→品質→食味の選抜順序を、まず食味(炊飯米光沢検定)による選抜から始めたためである。また交配組合せも意義深い。育成地ではコシヒカリの食味導入を昭和53年から始めた。ミナミニシキ・ニシホマレといった従来の品種にコシヒカリを交配し、食味優先に選抜を行ってきた。しかし残念ながらこれらからはものになる後代は得られなかった。食味と栽培特性とが結合できないのである。ヒノヒカリは早生と極早生の組合せから中生をねらうといった方法で成功した。100%満足しているわけではないが、いもち病抵抗性、耐倒伏性とも不十分ながら、中生でこの食味、この栽培特性というのは他に並ぶものが無い。

ヒノヒカリ誕生直前までコシヒカリを二毛作を主とする普通期水稻地帯に導入する計画が進められていた。二毛作地帯のコシヒカリは高温で伸長するため倒伏しやすく障害多く、収量が激減する場合がある。さりとて、早期栽培でも同様な問題がある。これは暖地農業の根本的な問題であり、九州の地域社会の存立にかかわる。

ヒノヒカリは以上のような理由で各県に迎えられたと思う。次は早生～晩生まで各熟期とも良食味品種が揃い、九州産米は何時入荷してもトップクラスとなるようにすべきである。

また、奨決の中で明らかにしていただいたことであるが、ヒノヒカリは穂発芽難である。倒伏しても品質・食味が変化しにくいであろうし、梅雨ごしの食味が急に低下することもないであろう。また刈遅れせざるを得なくなった場合、食味がどの程度低下するかも気になるところであるが、刈遅れた場合でも低下が小さいようである。刈遅れしてもよいということではないが、大量に作付されるとどうしても扱いの不十分な米も含まれてくる。それが全体の評価を落とす例はよくある。ヒノヒカリはそうした点で、最悪の条件下でもなお第一級の品位を保ち得る希望ももてる。

暖地農業の特徴は①多様性、②高温、③市場遠隔性と言われている。③はともかく①、②を生かしつつヒノヒカリが広く普及し、まさしく西日本・九州からの陽の光として全国にゆき渡り、暖地農業の基軸となることを期待する。さらに、このような地域間競争が効率良く發揮されるならば、一地域の活力ばかりでなく、日本農業全体の活性化につながることを確信する。

育成従事者：八木忠之, 日高秀光, 愛甲一郎, 西山壽, 小八重雅裕, 轟 篤, 黒木雄幸, 吉田浩一, 本部裕朗

(宮崎県総合農業試験場水稻育種指定試験地主任)